

クアラルンプール日本人学校における特色ある教育活動

—— 開校 50 周年を迎え、持続可能な活動にするために ——

前在マレーシア日本国大使館附属クアラルンプール日本人会日本人学校 教諭
鳥取大学附属中学校 教諭 中 村 仁

キーワード：教科外指導、現地理解教育

1. はじめに

クアラルンプール日本人学校（以下、JSKLと略す）はキアペン校舎時代（1966年～1976年）、タマンセプテ校舎時代（1976年～1993年）を経て、1993年4月に現在のスバン校舎へ移転してきた。そして、2016年度には、開校50周年を迎え、特徴ある教育活動を今後も持続可能なするために、自ら動いた3つの取り組みについて述べていく。

2. 特色ある教育活動

(1) カンボンホームステイ

①現状

JSKLでは、カンボンホームステイという、いわゆるマレーの田舎体験が毎年行われ、2018年で通算25回の開催となった。このように息の長い取り組みは世界の在外教育施設でも例がなく、2016年には、東京学芸大学国際教育センターの見世千賀子准教授の視察が行われた。

2017年度に実施したセパン・バングリスの会場は、村全体が世界中からホームステイの受け入れを行っており、マレーシアを代表する農作物であるゴムの木、コーヒー、パームやしの収穫体験ができるよう、隣接する土地に植えるなどの工夫がされ、充実した体験活動ができる。このように、現地理解をする上で貴重な体験活動となっているが、カンボンホームステイが行われるきっかけやあゆみ、25回も続いてきた貴重な体験活動といったことについて、教員自身が理解していないのが現状である。



ゴムの木からゴムを採集する様子

②持続可能な活動にするために

2016年度に引率教員として参加することになり、カンボンホームステイの歴史を詳しく知りたいと考え文献を探すものの、資料が散在しており、正確な成り立ちを把握することができなかった。そこで、これまでのカンボンホームステイのあゆみを調査研究し、記録を残すことにした。

第1回目のカンボンホームステイは、スバン校舎移転元年である1993年8月に中学部の生徒を対象に初めて実施された。そのときの発起人である佐々木匡人氏は、『第1回感想文集』の中で取り組みの経緯を述べている。

海外に暮らしている我々は、「異国文化理解」の最前線にいる。周りがすべて異文化なのであるから、これだけ恵まれた環境は日本には求め得ない。（中略）今回のホームステイは、異国の地にあつて、志はあつても、治安の面から自分たちだけでは思うように行動できないでいる日本人の子供達に、真正面からの異文化理解に取り組ませてあげたいとの願いから企画されたものである。

また、当時の国際交流ディレクターである小山和智氏は『開校三十周年記念誌』の中で、カンボンホームステイの始まりについて次のように述べている。

平成五年八月、教職員有志六名がネグリスンビランの農村に中学生二十一名を連れて行き、宿泊体験をさせたことは大きな反響を呼びました。マレーシア理解に実感が伴わない子供たちに対する焦りが、一部の教職員を「暴走」させたわけですが、体験学習の教育効果は絶大です。二回目の実施を求める保護者の期待の中、赴任直後の私は議論の渦中に置かれました。プログラムの位置づけを巡って話し合いが続き、結局「学校行事に準じて」扱われることになりました。

このように、発起人の佐々木氏を中心として6名の実行委員が企画したのがカンボンホームステイの始まりである。その際にPAMAJA（JICAが実施している「21世紀友情計画にもとづく、ASEAN（東南アジア諸国連合）青年招へい事業」に参加した日本留学経験者の会）に協力を仰ぐことで、実施が実現した。これは、PAMAJAの方々の「お世話になった日本人のみなさんへの恩返しと、21世紀に向けての日馬交流のために」という願いも詰まった活動である。

中学部の活動から始まったカンボンホームステイは、PAMAJAの協力のもと、2005年の第13回まで開催されている。その間、1998年より小学部（5・6年生）へも広がることとなり、小学部はALEPS（マハティール首相が押し進めたLOOK EAST POLICYによって日本に留学し、マレーシアと日本との懸け橋のために活動する、「マレーシア東方政策元日本留学生同窓会」）の協力で実施された。以後、小学部の活動も2005年まで続くこととなる。

回数	中学部場所(協力団体PAMAJA)	生徒数	開催年度	回数	小学部開催場所(協力団体ALEPS)	児童数
1	NEGERI SEMBILAN Kr.Linggi Kg.Pematang Pasir	21	1993年	1	NEGRI SEMBILAN Kuala Klawan Jelebu Kg.Chenor	55
2	PERAK Kg.Cenderrong Balai	30	1994年	2	NEGRI SEMBILAN Kuala Klawan Jelebu Kg.Chenor	86
3	PAHANG Kg.Budu Kg.Pemjom Kg.Tanjung Besar	34	1995年	3	NEGRI SEMBILAN Kuala Klawan Jelebu Kg.Chenor	84
4	SELANGOR Kg.Sungai Sirrch	38	1996年	4	MERIMAU	61
5	MELAKA Kg.Duyung	36	1997年	5	NEGRI SEMBILAN Kuala Klawan Jelebu Kg.Chenor	67
6	NEGRI SEMBILAN Kg.Lonek	42	1998年	6	SELANGOR Darul Ehsan Kg.Ulu Chuchuh	83
7	PAHANG Felda Jengka,Ulu Jempol	46	1999年	7	SELANGOR Darul Ehsan Sepang Kg.Ulu Chuchuh	76
8	PAHANG Bander Muadkam Shah	67	2000年	8	SELANGOR Darul Ehsan Sabak Bernam Sg.Besar	74
9	PERAK Kr.Temelong	56	2001年			
10	MELAKA Kg.Duyung	46	2002年			
11	PERAK Kg.Telak Sarch	53	2003年			
12	PERAK Bagan Datoh	57	2004年			
13	PAHANG Kg.Janda Baik	53	2005年			

2006年からは、小中合同開催となった。また、この年より協力団体がALEPSの一団体になっている。これらの経緯は不明であるが、合同開催になった2006年以降の流れを表にまとめた。

合同開催になった2006年度以降のカンボンホームステイの様子

通算	合同	期日	開催別	ステイ先	備考			
14	1	2006 H18	7/29-31	合同	サパプルナム	協力団体がALEPSに統一		
15	2	2007 H19	7/28-30	合同	カンチョン・ダラ			
16	3	2008 H20	7/26-28	合同	ウルチュチュ			
		2009 H21	中止			新型インフルエンザのため		
17	4	2010 H22	7/24-26	合同	サパプルナム	最後の文集		
18	5	2011 H23	7/23-25	合同	セパン・バングリス			
19	6	2012 H24	12/22-24	合同	セパン・バングリス	夏休みはラマダンと重なるため冬休みに実施		
20	7	2013 H25	12/22-24	小	セパン・バングリス	中	カンチョン・ダラ	ステイ先の収容人数の関係で小中別の場所
21	8	2014 H26	12-20-22	小	カンチョン・ダラ	中	スンガイ・ハジドラニ	
22	9	2015 H27	12/20-22	小	スンガイ・ハジドラニ	中	セパン・バングリス	
23	10	2016 H28	7/29-31	合同	カンチョン・ダラ			受け入れ人数をしばって合同開催
24	11	2017 H29	7/29-31	合同	セパン・バングリス			
25	12	2018 H30	7/28-30	合同	ジャンダ・バイク			2005年の中学部開催場所

*資料はPCデータや学校要覧などを参照し中村が作成したもの

その後、2009年は新型インフルエンザで中止になったものの〔第4回文集 実行委員長のことばより〕、以後は毎年継続され、2018年度は第25回の開催（小中合同開催では第12回）となった。また、2012年からは受け入れ先を3か所に固定し、ローテーションしていたが、2018年はALEPSから提案があり、2005年に中学部が開催した場所にした。

一方、開催時期の変更や合同開催から再び別開催にするなど2012年から紆余曲折する。ムスリムにとって重要なラマダン（断食）と夏休みが重なるため、受け入れが困難であるという理由から、2012年から冬休みに実施することとなった。その結果、参加者が増加し（冬休み中は一時帰国者が少なく参加しやすいため）、2013年からは小中別会場で実施することとなった。しかし、生徒指導面で様々な問題が生じたため、2016年からは受け入れ人数をしばり、再び合同開催に戻した。また、同年よりラマダンが夏休みに含まれなくなったため、冬休みから夏休み期間へ再び戻している。

(2) 中学部3年 修学旅行

①現状

JSKLでは、宿泊学習を小学5年生から系統立てて実施している。

小学部5年生	「フレーザーズヒル（～2016）」「ゲンティンハイランド」に行き、半島マレーの山の自然を体感する
小学部6年生	「クアantan」に行き、海亀放流など、半島マレーの海の自然を体感する
中学部1年生	1※「FRIM」に行き、すず鉱山の跡地利用として再生された、2※KLのジャングルを体感する
中学部2年生	「ポートディクソン」に行き、マラッカ海峡での「いかだづくり」を通じて仲間づくりをする
中学部3年生	マレーシアの自然から学ぶ学習の集大成として東マレーシアのボルネオ島の「クチン」に行き、海と山の大自然を体感し、ボルネオ固有の生態系を学ぶ

1 ※ Forest Research Institute Malaysia

2 ※ Kuala Lumpur

私が2017年度に中学部3年学年主任を引き継いだ時、昨年度の修学旅行の反省点の引継ぎ事項として「植林は廃止」して、「新たなアクティビティを企画検討する」とあった。理由は、例年ムスリム生徒のために、ラマダン時期は宿泊行事を開催しないといった配慮がされていたが、本年度はムスリム生徒が在籍していないので、ラマダン期に修学旅行を実施しても問題ない。ただ、ラマダン期は政府系機関の活動が縮小・停滞するので植林ができない。そこで、元来「植林することに意味を見いだせなかった」ので、これを機に「植林は廃止」して、「新たなアクティビティを企画検討する」ということだった。

②持続可能な活動にするために

なぜ修学旅行がボルネオ島なのか。その理由を考えると、このような理由で植林活動を廃止することに矛盾を感じ、①政府系以外のNPOや民間組織で植林をしている方を新たに探し、②植林することに意味をもたせることにした。

まず、①の情報収集を行った。すると、サラワク州クチンで30年間にわたり、植林活動を行ってきた酒井和枝さん（INSAR TOURS & TRAVEL 代表）が在住していることがわかった。酒井さんの取り組みは、2013年4月19日テレビ東京放映『世界ナゼそこに？日本人～知られざる波瀾万丈伝～』でも紹介されている。そこで、酒井さんに直接連絡を取り経緯を説明すると、酒井さんがクチン市役所に交渉してくださり、ラマダン期間中だが植林活動を実施してくださることになった。また、酒井さんから「日本人学校なら、喜んでお話をさせていただきます」との回答をいただき、講演会を実施することにした。

次に、②の改善として、今までバラバラに行われていた学習内容を系統立てて組み立て直すことにした。活動の柱をSDGs（持続可能な開発目標）の視点から「植林」にして、ボルネオの自然保護・森林再生を体感させる取り組みを通して、持続可能な社会に向け、国際社会に生きる日本人としての自覚と責任を持たせることをねらいとした。

また、活動の流れだが、事前学習としてボルネオ島のジャングルが乱開発されており、多くの木材が建設用資材であるラワン材として日本へ輸出されている現状を知った上で、修学旅行中はオランウータンの野生保護区に指定されているセメンゴリハビリセンターを見学する。その際、なぜ保護区を設けなくてはならないのかを事前

学習から想起させる。次に、シードバンクに行き、植林用のフタバガキ科の苗の栽培について講習をうける。その後、クチン市役所の方々の協力により植林活動を行い、まとめとして講演会「植林活動に学ぶ」の開催を行う。酒井さんがどんな思いで植林活動をしているのか知り、国際社会に生きる日本人としての自覚と責任を学ぶといった内容だ。

この取り組みにより、生徒たちはマレーシア在住の日本人として持続可能な農業へ貢献できたという自己有用感を味わったようで、卒業時の生徒のコメントに多く述べられていた。以後、「植林」を柱にした修学旅行は、持続可能な内容として、JSKLに引き継がれていくことになった。一度は活動の意義を見失い、消えそうになった取り組みに、新たな価値を付けることができたことは、とても感慨深い。

(3) 盆踊り

①現状

クアラルンプール日本人会主催の盆踊り大会が主催されて2018年で42回。櫓に上ることができるのは、JSKL 中学部3年生のみ。中学校生活の集大成となるこのビックイベントは、Kompleks Sukan Negara Panasonic Shah Alamという大きな競技場を貸し切って開催され、参加人数は例年3万5千人～4万人にもおよぶ、世界一の盆踊り大会といわれている。

この盆踊り大会に向け、Alam Shah、Tunku Kurshiah、Kuen Cheng High School、Catholic High Schoolの4校と事前に国際交流会を開催して、JSKLの生徒が現地校の生徒に踊りを教える。また、当日は東京音頭、大東京音頭、花笠音頭、お日様音頭（JSKL開校20周年を記念してつくられたオリジナル音頭）の4曲にあわせて、男子生徒による和太鼓の音がマレーシアの夜に響き渡る。また、女子生徒による華やかな踊りが櫓の上で披露される。櫓の下には、交流した4校の現地校の生徒が輪を作り、その周りを多くの観客が何重にもわたり輪を作って踊る様は、圧巻だ。日本では少子化の影響もあり、各地の盆踊りが縮小されたり、開催の危機に直面したりしているが、多民族国家のマレーシアで、こんなにも受け入れられていることを知り、日本人として誇らしく思う。



Star Metro CENTRAL / 25 JULY 2018

②持続可能な活動にするために

そんな恒例行事だが、例年悩ませていることがある。それは、太鼓と踊りの継承だ。毎年、中学部3年の教員が、前年度の様子を記録した動画を見て、生徒に教えてきた。それならば、3年生から2年生に踊りの継承をさせてはどうだろうと考えた。そこで、3年生の生徒たちに話を持ち掛け、3年生が2年生に呼び込み太鼓と踊りを教える取り組みを行った。また、卒業にあたり例年、卒業制作を実施しているのだが、KL在住の和太鼓奏者の中西様にお願ひして、自分たちが叩いた太鼓の皮の貼り替えをすることにした。張り替えた証に太鼓の中に記名をさせ、新しく蘇った太鼓を、三送会で披露した。また、太鼓の「ばち」を2年生に引き継ぐといったセレモニーをすることで、持続可能な行事として盆踊りを継承していくといった新しい伝統をつくることができた。

3. おわりに

2016年度には開校50周年、2017年度には日馬外交関係樹立60周年を記念して4月に当時の皇太子殿下（現天皇陛下）をお迎えするなど、節目となる年に在籍し、貴重な経験をさせていただいた。今後は開校100周年にむけて私の取り組みが、微力ながらJSKLの発展に貢献できると幸いである。